

稀代の目利き、福井七子先生へ贈る言葉

外国語学部長
外国語教育学研究科長
竹内 理

敬愛する福井七子先生が、ご定年を迎えられ、30余年に及ぶ関西大学での学究生活に別れを告げられる。寂しさを感じずにはおられない。先生から折に触れて頂いた数冊の本を改めて見返してみると、その寂しさが一段とこみ上げてくる。それだけ先生の存在感が大きかったのであろう。

先生は稀代の目利きである。たとえば、研究テーマを例にとると、先生の選ばれた日本文化論のテーマは、年月を重ねるにつれて、今日性が増しているように思える。通常ならば、歳月とともに時代性を失い輝きを減ずるものだが、先生のテーマをそうではない（ここでは紙幅の関係でたった1-2行で表現しているが、とても希有なことであり、驚きに値する）。先生の目利きぶりは、何も学問の話だけではない。ちょっとした小物でも、お店でも、食べ物でも、普遍的で価値の高いものを選ばれているように思う。先生にお薦め頂いたものに外れはない。

人を見る目も同じである。先生の人物評は端的にして、的を射ている。その時は分からなくても、そして表面的には見えていなくても、後になって「じんわり」とその意味がわかってくる。時にその慧眼ぶりに、「怖い」と思うことすらあった。しかし、決して相手を貶めるような評ではなく、そこに先生の持つ上品さを感じる。

しかし、先生には「乙女チック」（非礼をお許してください）な側面もある。若い頃、さる有名な英国のスターに贈った一輪の花は、数百本のバラの花を超える効果があったと聞いている。あのかわいらしい笑顔とともに、一輪の花を差し出された大スターは、さぞや大和撫子の凄みを嘯みしめたことであろう。その他、様々なエピソードをお聞きしたが、いずれも未だに忘れられないものばかりである。

こんな先生ともお別れをする時が来た。しかし、関西大学を去られても、先生が居なくなるわけではない。先生さえよろしければ、また、時々にお会いする機会を持ち、お話を聞かせて頂きたいものである。福井先生、本当にありがとうございました。